新橋小学校
学校だより
令和４年６月 30 日
令和４年度　第４号

これまでとこれからの狭間で

校長 西尾 琢郎

梅雨の季節です。しかし、私たちが長いこと慣れ親しんできた梅雨時の風景も、年々違ったものになってきているのを感じざるを得ません。糸を引いてしとしとと降る長雨というイメージも今は昔。現在では、時に夏の盛りそのもののような猛暑の日差しをはさみながら、ゲリラ豪雨の名がふさわしいような、激しい雨や雷など、すっかり騒がしい季節になってしまった感があります。

そして学校でも今、学びのあり方が、これまでとは違ったものへと急速に変わりつつあります。いえ、正確に言えば、それが求められている、というべきでしょう。その変化を一口に言えば、「答えのない問いに向き合う学び」だと考えています。

今日の世界は、あまりにも多くの「出口の見えない課題」に取り囲まれて、窒息寸前です。終わりなき戦争や紛争、環境問題、飢餓や貧困、そして拡大し続ける格差など、どれひとつとっても、確たる解決策が見いだされたものなどありません。これらの課題は、どれもが昨日今日突然に生じたものでなく、長い間指摘され続けてきたにも関わらず、私たち大人は、ときに対岸の火事だと傍観し、いやそれは錯覚だろうと座視しながら、本当の意味で真剣には取り組んでこなかったのではないでしょうか。

そんな中、多くの学校では、過去150年もの間、その枠組みを大きく変えることなく、「すでに解決された問題の答え」を教え続けてきました。そうした教育のあり方が、ある意味で今日の世界を作ってきたとも言えるのです。けれどももうこれ以上、「待った」は通用しません。私たちは今、私たち大人が答えを持ち合わせていない問題があることを子どもたちに率直に伝えながら、子どもたちと一緒に、その問題について学び、考えていくという姿勢が何より求められています。

コロナ禍の年月の間に、一斉休校や分散登校、リモート授業など、これまでの学校の「あたりまえ」をくつがえすような、さまざまな取り組みが行われてきました。私たちはその中で「なくてもよかったもの」を知り、また「学校が本当に大切にすべきこと」への気づきを得てきたと思います。感染状況が（いまだ無視できないものとはいえ）一定の落ち着きを見せつつある今、改めてこれからの学校、子どもたち（と私たち）の学びについて考え、行動していく必要を強く感じています。

「教え導く」から「共に学び寄り添い歩む」へ。これからの学校は、新しい安定を探す、というよりも、変化し続ける社会と時代に高いアンテナを立てながら、しかし一方で「変わらず大切にしたいこと」の旗を高く掲げて進んでいきたいと思います。どうかみなさまのお考えもお聞かせください。